

青鷺

泉鏡花作

一

「御覽じやる通、此の邊四方青田で、庄屋の森がござります、また森の前に大池がござりますに因つて、地躰いかいこと居りまして……」  
と寂しい温泉宿の雨の夜に、甚吾と云ふ夜廻の爺が話した。――御維新前は、此爺、鷺流の狂言師だつたさうで、一時火の消えたやうに成つたのが、頃日大層な勢で流行出したから、諸流の月並の會の太郎冠者は勤りさうなもの、片田舎の湯宿なんぞに、夜番をして居なくても可ささうに思ふが、いづれ其の昔も前座、……いや狂言師に前座は可笑しい。アドとか小アドとか云つたのであらう。

逗留中は降籠められて、つい居廻へぶら／＼歩きに出掛けることさへしなかつたが、其の時、爺がいふ大池は途中で見た。鑛泉は丘のやうな處にあつて、其の丘をだら／＼と下りて、立樹を四五本。

松まつのたか高いのをく潜ると、其そこ處に用水ようすゐの溜たまりがある。周まは圍は總躰そうたいで七八町ちやう、北きたの片隅かたすみか深々しんくとした森もりで、あとは其その樹立こたちの名残なごりを水みづへ流ながしたやうに淺あさく次第しだいに疎まはらになつて、其その四五本ほんの松まつといふのも、矢張やっぱり森のいちぶ一部であるが、私わたしが通とほつた時ときは、水みづが満々まんくとあつて、實際じつさいよりも餘程よほど渺べうとして見みえた。

といふのが雨あめ續つゞきで溢あふれた所せ為ゐで、汀みぎはには恚かう、すら／＼と伸のびた葉はばかりの菖蒲あやめ、田たの畝あぜが二條三條ぢ、水みづ浸びりに沈しづんで、稻葉いなばの伏倒ふしたふれた上うへに乗のつて、二人釣ふたりつりをして居ゐたのがあつた、殊ことに黄昏たそがれだつたから餘計よけいに廣ひろく見みえたのである。

のみならず、福井ふくいの町まちを離はなれてから、二里り不足たらずの間あひだ、唯畝々たゞうね／＼した田畝たんぼ道みちで、處々ところ／＼小橋こはしがあるばかり、目めにつくのは、湯ゆの廣くわ告くの黒旗くろはたと、石地蔵いしぢざうと、藁わら葺ぶきにした肥料ひれうの溜桶ためをけのうしろに、灸點きうてんの、これも旗はたが立たつて居ゐる、それくらゐなものだつたので、池いけを見みた時ときは宛然まるで別天地べつてんちへでも出でたやうな氣きがした。鰻うなぎ、鯰なまつ、などが澤山たくさん釣つれるのだと言いつて、水浸みづびたりの畔くろに

たゞす  
イんだのばかりではない、池の眞中に田舟を浮べて、  
いちにんほくがぶり  
一人頼冠をばして釣つて居た奴がある、晩方だから  
其の形煙のやう、舟はぢつとして其のまゝ沈んで行  
くやうに動かないで、却つて蓴菜の浮葉が、誘ひつ  
れ／＼、風につと寄つたり、分れたり、淋しい事。

おまけに左手の汀は、寺でもあつた跡と見えて、  
苔の生えた石燈籠が、茫乎立つて、墓石がすらすら  
と、其處へも水が溢れて居た。池も空もどんよりし  
て、唯見た處は、町も村も國も爰が行止りで、あと  
は筒抜けに海のやうな野原でもありさうな心細い  
景色が、大に趣があつたので、しばらく、腕車を止  
めて視めたが。

田舟の中の人の形が、舷へつかまつて俯向けに水  
を覗いた。その状は、何の事はない、其處から地獄  
でも覗くやうで、悚然として直ぐに腕車を急がせ  
た。……爺の言ふのは其の池である。

「何が居る、」

「何がおつしやつて、其の、青鷺でござります

て、・・・」

「鷺が、」

何するものぞと思ふと、爺が早く見て取った。不平らしく、

「驚か一口におつしやりますが、旦那様、彼奴、徳利の形で水に立ちますだけあつて、此の親仁には酒と一ツに、命取りでござります、恐しい！」  
と舌を巻く、唇を反らして。凡そ世の中に、青鷺のために生命を取られるといふのがあるか。

甚吾爺は、手拭を掴んで臂を張った。

「え、庄屋殿の森から大池へかけまして、青鷺の巢でござりまして、何時太いこと居りますのが、又此の五月雨頃は春でござりますわ。」

や、いづれも名代な奴等、小溝端で蚯蚓を突いて、村の小兒に驚かされたり、川下で鮒を狙うて、船を見て遁出すやうな甘いのぢやござりませぬ。

福井の市へ伸して出て、人死のある棟の上でぎや

ツと啼ないたり、縁切えんきりの背戸せどでくわツと喚わめいたり、三  
国港にみなとへ飛とび歩あるいて帆柱ほぼしらを揺ゆすつたり、したゝかなこと  
をはだかすでござります。」「

甚吾じんごは苦々にが／＼しい澁面造しぶめんづくり。

「其の巢が總出で、糧を漁るでござりまするに依つて、夜になると、大池の岸は首の押せ／＼で驚だらけ、嘴を揃へたら、何の事はござりませぬ、鳥の國の兵隊が行列をした躰、いや夥しい事は、お百姓が肥料に取片附けまするので目立たぬのでござりまするが、森の中は一夜の中に敵めが糞で、眞白に積るのが毎々でござりまする。何奴も、年功を徑て居りまするゆゑ、日中は寂寞、羽音もさせず潜んで居まして、夜に入つてから暗中を、ぎやツと言つては、口から吐き出す呼吸を燃いて其の灯で、何と、鰻を鵜呑み。

箕で計るやうな大池の魚は、波を立てて遁げるでござりまする。

中にもあぶれものが、腹こなしに來まして、親仁が夜巡の路を、二間置き、三間置き、五ツ六ツ居る事やら、其とも一羽で幾度もするやら、眞の暗の足許から、ばツと羽折をして起ちますわ。咽喉で呼吸を引いて、はアとお前様、魂が天上をしますると、

其ツ切、物音も聞えぬでござります。

此方は氣が上ずりまして、いやはや、身體が宙へ上ツたかと思ふと、踏出す足もぶらりと下りさうで、窘んで一足も動けぬでござりますよ。」

「成程。」

こりや、いかにも驚くだらう。で爺のいふには、「初手に食ひました時は、嘘にも天狗に釣上げられたかと思うたでござります。氣味の悪い冷汗で、びつしよりになつて、漸々腰を据ゑた。引いた呼吸をウムと詰めましたなり、恐々歩行き出しますると、五間と出ぬに、又ばツと飛びますわ。」

此の術で晩方なぞは、お百姓が、畔で尻餅を搗くことがござりまするを、豫ねて聞いて居りましたに因つて、思ひ出して、扱はおでやつた、庄屋の森の脚長殿ぢや。然やうに心附きましたれば太う恐い事はなくになりましたものの、其の時をはじめ毎晩、其が又時節になりますと、毎年でござりまする。ちやんと心得て巡回り、まして、不意を打たれては

ぎよツとせぬ事はござりませぬ。

おのれ見ると、櫛の木の用心棒、六尺手ごろな奴  
を用意しまして、暗の中を透し透し、此方も夜巡、  
目は馴れて來ましたなり、一本脚を搔拂うて、胴中  
ひし折つて下されうと、毎晩のやうに狙ひますが、  
如何な其の術を食ひますか。

まざノ、と形を見せて、引寄せて置いて、棒が横  
なぐれに空を切るを合圖に、立ちざまに耳を拂ふ、  
鼻を強く、嚏は出ます。」

と鼻頭に皺を寄せて、くすぐつたいのを堪へる顔  
色。談に乗つて、縁側に胡坐を組んで、握拳を膝に  
ついて饒舌る。

「これが又毎晩で、馬鹿らしくはありまする、泣  
くにも泣かれませず腹ばかり立ちまする。をかしさ  
はをかしようござりまするの。如何様、火があれば、  
敵殿いたづらはしませぬが、片手業で、此の拍子木  
を打ちまするに、便が悪うござりまするに就いて、又



暗くらやみで歩ある行く、例物れいぶつが遊あそびますぢや。

磨すつた揉もんだが今年ことしになりまして、つい一昨晩いつさくばん。

お節句せつくに就つきまして、帳場ちやうばから一合下がふくだされたのでござります。三國みくに鯉がつをのぶつ／＼切ぎりで、嘗なめますほどに、けるほどに、とろ／＼と肱枕ひちまくら。一天四海波いつてんしかいなみを打うち治をさめたまへば、一寢入ひとねいりいたしましたして、酔よひざめ覺ざめのばツと目めが開あきますると、お定さだりの刻限こくげん。

お造酒みきがまはつて景氣けいきはついたり、雨あめも止やんで居をります。不圖ふとおも思だひ出して、恚かういふ時ときぢや、狐きつねでも來こい、狸たぬきでも來こい人間にんげんにかなふ事ことではおりない。おのれやれ、見みろ、年來としごろの意趣いしゆばらしと、先まづ身みじ仕度たくをいたしたでござります。」

甚吾爺は然う言つて、手拭を扱いて寤めた頸へ引掛けた。

「ト拍子木を預けたでござります。多時打棄つて置いた用心棒、提灯を點けて參り、物置の隅から引出しまして、あとを閉めて錠を下して、さて、提灯を吹消すと、勝手の知れた臺所の格子窓に引掛けたでござります。其處で一ツ身構をいたして、拍子木は首へかけたなり棒ぐるみ、咽喉を挟んで力チノと遣りまして、いよ／＼庭傳ひに繰出しましたわ。これは此の邊のものでござる、と先そろり／＼と參りながら、八方へ目を配つて、丁ど此の座敷の前を通りまして、やがて七八間歩行きますと、そりや敵の氣勢がいたしまするで、盲目打に一番、やツ！と横に拂つたでござります。

手應處か、すぼんと飛んで、一間前へ、しゆつと立ちます。そろ／＼と探り寄つて、曳！ やツ、と拂ふと、すぼんと飛んで、眞の闇の一間前へ。毎

度と申すが此の傳で、酔つた勢、おのれがおのれが。

せめて、長脚の爪尖なりと、挫いてくれうと、打ち  
ちはづし／＼、つい浮々と長追して、あの大池の岸  
まで參つて、どんづまりに水をはじいた棒で、女の  
裾を拂ひますると、手答へなく、煙を突いた心地、  
呀、青鷺に女の裾がと、吃驚して見上げますると、  
高い處に眞白な長き顔、目もなければ眉もないのが、  
荔枝のやうな口を開けて、おはぐるを見せまするで  
早腰を抜かして這ひました。

で、何が早や泥龜のやうに足を引摺つてそれから  
一目散に遁げました。處で、根から眞個には。

何と恧やうなことは、御逗留の、他のお客人に申  
される儀ではござりませぬ。内の者にも話されませ  
ぬが、お見懸け申してお尋ねを幸ひ饒舌りまする次  
第。親仁も不思議でなりませぬ、青鷺の、脚を、脚  
をと狙ひました其の脚が、つと女の裾になりました  
わ、地躰暗で、葦やら蘆やら、柳の葉やら、据やら、  
袂やら、見分けのつく譯はござりませぬに、小袖

の褌を判然見まして、其に合はせるものを着たらしく、ふきの蒼いまで、明いほどに認めました。其さへ解せぬでござります、落着いてから考へますると、例の青鷺の吐く呼吸の怪火の光に映つたかとも思はれますが、さて何も彼も顛倒いたしましたわ、其とも、夜中に棒を使うて、青鷺を追かけます親仁が、現に此處に居ります上は、また何と間違うて、其の時分大池の邊を歩行く女中がないにも限らぬでござります。兎もあれ、今一度、確に見届けたうござります。なれど、なか／＼以て、親仁などが、なか／＼以て。

【完】